

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

1日

仏滅 婁

旧1月4日

土曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

ほんもん

ほっしん

じゆき

本門の法身の授記

「本仏の寿命が久遠であると聞いた菩薩への授記」

寿量品で本仏釈尊の寿命が久遠であることを聞いた菩薩や衆生が得る功德を十二段階に分別(分類)したことを「本門の法身の授記」といいます。

迹門(法華経前半)の授記は、声聞・縁覚の二乗が菩薩と同様に成仏することを認めた未来の成仏であるのに対して、本門の授記は仏の久遠を聞いて、弟子もまた久遠の寿命の中で未来に向けて成仏の段階を昇っていくという事実の利益を指しています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

2日

節分

大安 胃

旧1月5日

日曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

得無生法忍

とく む しょうぼう にん

「人生の変化に振り回されず励む力を得る」

法身の授記の一つ目。

「無生」は生死の縛りを離れること、「忍」は続くこと、「無生法忍」は生死を離れた心持ちを持ち続けること、「生死」とは、生きること死ぬことを含めた人生の変化すべてを指します。

本仏の寿命が久遠であることを聞いたガンジス川の砂ほどたくさんの衆生が、人生の利害損得・栄枯盛衰の変化に振り回されることなく仏道修行に励み続ける力を得たというのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

3日

立春

赤口 昂

旧1月6日

月曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

とくもんじだらにもん

得聞持陀羅尼門

「善を持ち悪を止める力を得る」

法身の授記の二つ目。

「聞持」とは仏の教えをよく聞いて保つこと。

「陀羅尼」とは善を持ち悪を止める力のこと。

善とは不完全な状態から完全な状態に向かうこ

と、悪とはいいい加減な所でとどまること。

本仏の寿命が久遠であることを聞いたガンジス

川の砂の千倍ほどの衆生が、自分だけではなく、

他者にも説き勧めて善を保たせ、悪を止める門に

入るように努める力を得たというのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

4日

先勝 畢

旧1月7日

火曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

とく ぎようせつ む げ べん ざい
得楽説無礙弁才

「迫害に負けず喜んで法説く力を得る」

法身の授記の三つ目。

「楽説」とは喜んで法を説くこと、「無礙」とはいかなる迫害にも負けないこと。

正しい法を説いても感心して聞いてくれる人ばかりではありません。

本仏の寿命が久遠であることを聞いた須弥山を中心にして四州八海の一世界を擦りつぶした塵ほどの衆生が、石を投げつけられても喜んで法を説く力を得たというのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

友引 鶯

旧1月8日

5日

水曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

得百千万億

無量旋陀羅尼

とくひやくせんまんのく

むりよう せんだらに

「無量の人々に陀羅尼を伝える力を得る」

法身の授記の四つ目。

「旋」とはめぐらせること、「陀羅尼」とは善を持ち悪を止める力のこと。

百千万億人以上の無量の人々に、次から次へと「陀羅尼」を伝えるためには、真剣に聞く人とながり続ける縁も必要です。

その最初の一人になる根本の力を、須弥山を中心に四州八海の一世界を擦りつぶした塵ほどの衆生が得たということです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

6

日

先負 参

旧1月9日

木曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

のう ふ たい てん ほう りん

能不退転法輪

「どんな障害があっても教えを弘める力を得る」

法身の授記の五つ目。

「不退転」はどんな障害があってもくじけない心。

「法輪」は車輪が回り続けるように教えを世に弘めること。

教えを聞いて満足する者ばかりではありません。迷いの深い者や誤った考え方をしている者が迫害を加えてくることがあります。

三千大千世界を擦りつぶして塵にした数ほどの衆生が「不退転法輪」の能力を得たのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

7

日

仏滅 井

旧1月10日

金曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

のう しょうじょうほうりん

げ

能清浄法輪

「報いを求めない心で説き続ける力を得る」

法身の授記の六つ目。

「清浄」とは報いを求めない心。

「清浄法輪」とは名声や金品、感謝などの見返りを求めずに、教えを世に説き続けることです。

教えを弘めることは仏さまの恩に報いることであり、それを喜びと感ずることができれば自分への報いを欲することはないでしょう。

二千の中千世界を擦りつぶして塵にした数ほどの衆生が「清浄法輪」の能力を得たのです。

妙法蓮華經分別功德品第十七

爾時大會。聞仏説壽命劫数。長遠如是。無量無辺。阿僧祇衆生。得大饒益。於時世尊。告弥勒菩薩摩訶薩。阿逸多。我説是如来。壽命長遠時。六百八十万億。那由他。恒河沙衆生。得無生法忍。復有千倍菩薩摩訶薩。得聞持陀羅尼門。復有一世界。微塵数菩薩摩訶薩。得樂説無碍弁才。復有一世界。微塵数菩薩摩訶薩。得百千万億。無量旋陀羅尼。復有三千大千世界。微塵数菩薩摩訶薩。能轉不退法輪。復有二千中国土。微塵数菩薩摩訶薩。能轉清浄法輪。復有小千国土。微塵数菩薩摩訶薩。八生当得阿耨多羅三藐三菩提。復有四四天下。微塵数菩薩摩訶薩四生当得。阿耨多羅三藐三菩提。復有三四天下。微塵数菩薩摩訶薩。三生当得阿耨多羅三藐三菩提。復有二四天下。微塵数菩薩摩訶薩。二生当得阿耨多羅三藐三菩提。復有一四天下。微塵数菩薩摩訶薩。一生当得阿耨多羅三藐三菩提。復有八世界。微塵数衆生。皆發阿耨多羅三藐三菩提心。仏説是諸菩薩摩訶薩。得大法利時。於虚空中。雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。以散無量。百千万億。宝樹下。師子座上諸

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

8日

大安 鬼

旧1月11日

土曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

はっしょうとうとく あ のくた ら きんみやくきんぼだい

八生当得 阿耨多羅三藐三菩提

「八回生まれ変わって悟りを得る」

法身の授記の七つ目。「阿耨多羅三藐三菩提」とは
仏さまの智慧を得て悟りに至ること。

本仏釈尊が久遠であることを聞いてすぐに悟り
に至るわけではなく、一歩ずつ徐々に仏に近づい
ていくために、私たちにも久遠の時間が与えられ
ているということです。

一つの小千国土を擦りつぶした数の衆生は八回
生まれ変わって「阿耨多羅三藐三菩提」を得られ
るといいます。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

9日

赤口 柳

旧1月12日

日曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

ししようとうとく

さんししようとうとく

四生当得・三生当得・

にししようとうとく

いっししようとうとく

二生当得・一生当得

「変わらぬ心で悟りに向かう」

法身の授記の八つ目から十一番目。

何度も生まれ変わりながら悟りに近づいていくことを「四生・三生・二生・一生」という数字で表し、それぞれに四・三・二・一の四大州(須弥山を囲む山海の四方にある四つの大陸)を擦りつぶして塵にした衆生の数が充てられています。数字には関係なく、幾度も生まれ変わりながら、様々な善行と苦難を通り抜ける中でも変わらぬ心で歩むことの大切さが説かれています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

10日

先勝 星

旧1月13日

月曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

かいほつ あのく た ら きんみやくさんぼだい

皆発阿耨多羅三藐三菩提

「仏に成ると決心した」

八つの世界を擦りつぶして塵にした数の衆生が
仏さまの悟りを得るために努力しようと決心し
たと説かれています。

人は置かれた境遇に左右され、善くも悪くもな
るものです。

今生だけ悟りに至ることは困難です。

本仏釈尊の久遠の時の中で、仏に成ると望んだ
決心を持ち続けることが法華信仰の肝要です。
それが法身の授記の十二番目とされています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

11日

建国記念日

友引 張

旧1月14日

火曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

うまんだらけ
雨曼陀羅華

まかまんだらけ
魔訶曼陀羅華

「天から華が降り注ぐ」

お釈迦さまが「久遠の寿命」と「法身の授記」について説かれたとき、お釈迦さまと多宝如来と十方から来集した諸仏、そして聴衆の菩薩や修行者や信者たちの上からさまざま華が降り注いできました。

天上界の人々が感謝の華を降らせたのです。

凡夫の上にも花が降ったのは、いつか仏に成るまで歩みを止めず修行を続けるようにと激励の意味もあるのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

先負 翼

旧1月15日

12日 水曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

みろく

りようげ

弥勒の領解

「教えを自分の身に引き比べ修行する」

華や香が降り注ぐなどの瑞相の後に、一切衆生も久遠のいのちを生かされていることを理解したと弥勒菩薩が偈文で述べられました。

偈文の内容は「分別功德品」前半にお釈迦さまが説かれたことの繰り返しですが、弥勒菩薩が自身の言葉で領解を宣言したことが重要です。

弥勒菩薩の領解に倣い、私たちもお釈迦さまの教えを自分の身に引き比べて、その功德を得られるようにと修行に励まねばなりません。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

13日

仏滅 軫

旧1月16日

木曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

し しん ご ほん
四信五品

「法華経を實踐し弘めていく功德を分別」

法華経を實踐し弘めていく功德を、お釈迦さま
在世の弟子たちの四つの体得段階「四信」と、滅
後の五種の修行「五品」に分けて説かれています。

「分別功德品」というタイトルの通り、久遠のお
釈迦さまの教えを信じる者の功德が、その人の
信心の浅深や力に応じて説かれていきます。

日蓮聖人は四信の初信「一念信解」と五品の初品
「随喜品」を末法における法華経信仰の在り方
であるとして「以信代慧」を述べられました。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

14日

大安 角

旧1月17日

金曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

いち

ねん

しん

げ

一念信解

「一念でも信じる功德は量り知れない」

四信五品、「現在の四信」の一つ目。

本仏の寿命が久遠であるなら、それを信じる私たちもやがては仏に成れるということなのです。

自分が仏さまのお力の中に包み込まれていると、わずか一念の間にも信じることができれば、その功德は量り知れないものだと言われています。

私たちの一生は数十年に過ぎないものですが、本仏の寿命が久遠だと信じ切れたなら、仏さまとともに久遠の時を生きることができると言えます。

妙法蓮華經分別功德品第十七

八生当得阿耨多羅三藐三菩提。復有四四天下。微塵数菩薩摩訶薩四生当得。阿耨多羅三藐三菩提。復有三四天下。微塵数菩薩摩訶薩。三生当得。阿耨多羅三藐三菩提。復有二四天下。微塵数菩薩摩訶薩。二生当得。阿耨多羅三藐三菩提。復有一四天下。微塵数菩薩摩訶薩。一生当得。阿耨多羅三藐三菩提。復有八世界。微塵数衆生。皆發阿耨多羅三藐三菩提心。

〈略〉

爾時弥勒菩薩。從座而起。偏袒右肩。合掌向仏。而説偈言

〈略〉

爾時仏告。弥勒菩薩摩訶薩。阿逸多。其有衆生。聞仏寿命。長遠如是。乃至能生。一念信解。所得功德。無有限量。若有善男子。善女人。為阿耨多羅三藐三菩提故。於八十万億。那由佗劫。行五波羅蜜。檀波羅蜜。尸羅波羅蜜。快提波羅蜜。毘梨耶波羅蜜。禪波羅蜜。除般若波羅蜜。以是功德。比前功

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

15日

釈尊涅槃会

赤口 亢

旧1月18日

土曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

ぎよう

ご

は

ら

みつ

行五波羅蜜

「六波羅蜜のうち五つの修行」

「五波羅蜜」とは、六波羅蜜のうち五つの修行。

①檀波羅蜜：檀那の訳、布施の意

②尸羅波羅蜜：清涼の訳、持戒の意

③羼提波羅蜜：忍辱の意、腹を立てないこと

④毘梨耶波羅蜜：精進の意、一心に励むこと

⑤禅波羅蜜：禅定の意、心を鎮めること

五波羅蜜の修行により般若波羅蜜(仏の智慧)を得る功德より、「一念信解」の功德の方が勝ることが説かれています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

16日

宗祖降誕会

先勝 氏

旧1月19日

日曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

りやく げ ごん しゆ

略解言趣

「菩薩道を歩んでいるからこそ仏の教えが解かる」

四信五品、「現在の四信」の二つ目。

本仏の寿命が久遠であると聞き、それを信じる私
たちもやがて仏に成れるという趣旨が解かると、
その功德は量り知れないと説かれています。

どんなことでも、実際にやってみて初めて解かる
ことがあると思います。

同じように、仏さまの教えを学び、人々を救うた
めに力を尽くしているからこそ教えの趣旨が解
かってくるのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

17

日

友引 房

旧1月20日

月曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

こう い た せつ

広為他説

「感謝の気持ちで広く教えを説く功德」

四信五品、「現在の四信」の三つ目。

本仏の寿命が久遠であると聞いて、それを信じる私たちもやがては仏に成れるということが解かり感謝の思いが膨らむと、仏さまに供養せずにはいられない心持ちになってくるものです。

広く人に説き、經典を書写し、花やお香を供えるなど、有難いという気持ちを表すための供養する人の功德は量り知れないものであり、仏さまの智慧を得ることができると説かれています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

18日

雨水

先負 心

旧1月20日

火曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

じん

しん

かん

じょう

深心観成

「深く信じ理解する者は仏の常住を知る」

四信五品、「現在の四信」の四つ目。

本仏の寿命が久遠であると聞いて、深く信じ理解する者は、お釈迦さまが娑婆世界で常に教えを説かれています。

「観成」の「観」とは考え方のことで、自分で深く考えたり、人に説いていくうちに、仏さまはどう考えるのか、そして自分に足りないものは何かという「観」を確立しなければならぬと気づき、信仰が深まっていくのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

19日

仏滅 尾

旧1月22日

水曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

初随喜品

しよ ずい き ほん

「仏の教えに悦びを感じる」

四信五品、「滅後の五品」の一つ目。

お釈迦さま滅後の私たちの修行の第一段階は、
經典や仏教書に触れ喜びを感じる事です。

お寺を参拝すると気持ちがいとか、仏教書を
興味深く読むなど仏道の入口に立つ事です。

開経偈に「無上甚深無上甚深微妙の法は百千万
劫にも遭い奉ること難し」とあるように、仏教に
縁遠い生活をしている人が法華経に出会うとい
うことは極めて稀で有難いことなのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

20日

大安 箕

旧1月23日

木曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

どく じゆ ほん

読誦品

「一心に経典を読む」

四信五品、「滅後の五品」の第二段階。

仏さまの教えに触れ喜びを感じた次の段階は、
一心に法華経を読むことです。

喜びを感じて法華経を読むと、心に深く信じて
読むようになり、さらにその教えを実践しようと
努めることになります。

法華経を心に読み、身に読むということは、お釈
迦さまの在世に堂塔を建て、香華や音楽を供養
するより大きな功德があると説かれています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

21日

赤口 斗

旧1月24日

金曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

せつ ぽう ほん

説法口品

「法華経を説く」

四信五品、「滅後の五品」の第三段階。

喜びを感じて法華経を読むと、そこに説かれてい
ることが身に付いてきます。

そして読むたびに有難さが深まり、他者に説く際
にもその有難さが伝わります。

お釈迦さまの滅後、世が險悪になり人心が荒れた
時代に、法華経を弘め信心を勧める功德は、お釈
迦さまの在世に、僧坊を建て多くの僧に衣服飲食
等の供養をするより大きいと説かれています。

妙法蓮華經分別功德品第十七

行五波羅蜜。檀波羅蜜。尸羅波羅蜜。俠提波羅蜜。毘梨耶波羅蜜。禪波羅

〈略〉

又阿逸多。若有聞仏。壽命長遠。解其言趣。是人所得功德。無有限量。能起如來。無上之慧。何況広聞是經。若教人聞。若自持。若教人持。若自書。

〈略〉

能生一切種智。阿逸多。若善男子。善女人。聞我說壽命長遠。深心信解。

〈略〉

若聞是經。而不毀悅。起隨喜心。當知己為。深信解相。何況誦誦。受持之

〈略〉

是善男子。善女人。受持誦誦。是經典者。為已起塔。造立僧坊。供養衆僧。

〈略〉

阿逸多。若我滅後。聞是經典。有能受持。若自書。若教人書。則為起立僧

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

22日

先勝 女

旧1月25日

土曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

ろく
ど
ほん
六度品

「菩薩行を積む」

四信五品、「滅後の五品」の第四段階。

「六度」とは六波羅蜜(布施・持戒・忍辱・精進・
禅定・智慧)の菩薩行のことです。

法華経を弘めることに力を尽くし、さらに六波
羅蜜の修行をする者は、大空が東西南北上下す
べての方向に際限がないように、量り知れない
ほどの仏さまの智慧を得ると説かれています。
法華経を信じ、学び、伝え、菩薩行を積むとい
う道をまっすぐに進むことが肝要です。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

23日

友引 虚

旧1月26日

日曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

しょうぎょう

ろく

ど

ほん

正行六度品

「六波羅蜜を実践する」

四信五品、「滅後の五品」の第五段階。

自身で六波羅蜜の修行を積みながら、実際に他者に法華経を説く法施、塔や僧坊を建てて財施、さらに持戒・忍辱・精進・禅定の実践を積み、仏さまの智慧に近づいた者は、お釈迦さまと共に道場にいるのであると説かれています。

「滅後の五品」は、物事の順序と軽重をわきまえて修行の段階を踏んでいくことの大切さを示しています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

24日

先負 危

旧1月27日

月曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

い しや り き どう

以舎利起塔

「舎利を納めた塔を起てる功德」

お釈迦さまが滅度した後、舎利を納めた塔を起て、宝物・香華・音楽などを供えます。

塔を起てるのは、亡き人の徳を讃え、その恩に奉ずる心を表すためです。

人目につくように高い塔を起て、鈴を懸けその音を広く伝え、燈火で常に周囲を照らします。

お釈迦さまの滅後の末法の時代に法華経を受持し弘める功德は、塔を起てるより大きい功德を得ることができると説かれています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

25日

仏滅 室

旧1月28日

火曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

あく せ まっ ぼう じ

悪世末法時

「悪世末法の時」

末法に法華経を受持し弘める功德が分別功德品には説かれています。

正しい教えが無くなってしまおうという末法思想に対して、日蓮聖人は末法の唯一の教えとして法華経が残ると主張されました。

「悪世末法の時」とは、法華経が弘まる時であり、法華経の行者が出現し、同時に法華経の行者に迫害を加え者が出現すると、この文が『開目抄』『観心本尊抄』等に引用されています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

26日

大安 壁

旧1月29日

水曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

い しゆ まん せん ぼく

以須曼瞻蔔

あ だい もく たか

阿提目多伽

「美しい花から香油をつくる」

「須曼」とは、「称意華(意(こころ)に称(かな)う華)」と訳され、心から美しいと思う花という意味です。

「瞻蔔」とは、「香華樹」と訳され、芳しい香のするクチナシのことです。

「阿提目多伽」は「善思華」と訳され、神々が降らす天華の一つとされています。

これらの美しい花から香油をつくり燈火をともし法華経に供養するならば、量り知れない功德を得ると説かれています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

27

日

赤口 奎

旧1月30日

木曜

妙法蓮華経分別功德品第十七

うもん なんふしん ずいじゅん いげせつ

有問難不瞋 随順為解説

「難問にも瞋らず、随順に解説する」

仏さまの教えに疑問を持った者がいかなる議論を仕掛けてきても、瞋ることなく相手の意を汲んで丁寧に説き明かす。

それが「随順に解説する」ということです。

相手の置かれた境遇を慮り、なぜそのような疑問を抱いたのかを解きほぐすように聞いて、相手が自ら答えに行きつくことができるように導くことができれば、仏さまに近づいているといえるのではないでしょうか。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

2月

28日

友引 奎

旧2月1日

金曜

妙法蓮華経如来寿量品第十六

ぶつし じゅうし じ

そく ぜ ぶつじゅう

仏子住此地

則是仏受用

じょうざいお ごとちゅう

きょうぎょうにやくざが

常在於其中

経行若坐臥

「仏子が住む地には仏が常住する仏国土である」

仏子とは仏さまの真実の弟子です。

法華経を何百遍読んでも、邪な心や欲望を抱きながら読んでいるなら仏子とはいえません。

仏さまの心持ちのまま教えを説く人が仏子であり、仏子がいるところに仏さまも共にいらっしやると説かれています。

そしてその場所は清浄な仏国土となるのです。

互いに仏子となり、仏さまが常住していると感じながら過ごすのが真の信仰生活です。

妙法蓮華經分別功德品第十七

況復有人。能持是經。兼行布施。持戒。忍辱。精進。一心。智慧。其德最勝。無量無辺。譬如虚空。東西南北。四維上下。無量無辺。是人功德。亦復如是。無量無辺。疾至一切種智。若人誦誦。受持是經。為他人說。若自書。若教人書。復能起塔。及

〈略〉

以舍利起塔 七宝而莊嚴 表刹甚高広 漸小至梵天 宝鈴千万億 風動出妙音

又於無量劫 而供養此塔 華香諸瓔珞 天衣衆伎樂 然香油蘇燈 周匝常照明

惡世末法時 能持是經者 則為已如上 具足諸供養 若能持此經 則如佛現在

〈略〉

若復教人書 及供養經卷 散華香抹香 以須曼瞻蔔 阿提目多伽 薰油常然之

〈略〉

有問難不瞋 隨順為解說 若能行是行 功德不可量 若見此法師 成就如是德

〈略〉

佛子住此地 則是佛受用 常在於其中 經行若坐臥